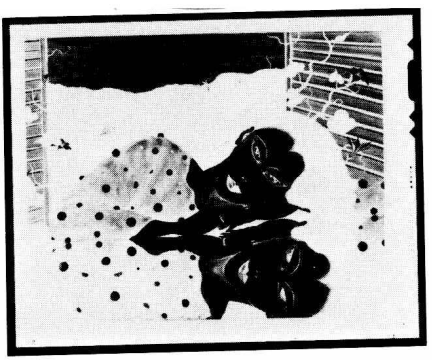
この世の外なら何処へでも

一條諦輔

この世の外なら何処へでも

一條諦輔

文藝春秋版



この世の外(ほか)なら何処へでも

1984年5月30日　第1刷

著　者　一條諦輔

發行者　西永達夫

發行者　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町 3—23
電話　東京03(265)1211(代)

定　價　900円

印刷所　共同印刷株式会社

製本所　矢嶋製本株式会社

© Teisuke Ichijoh 1984　Printed in Japan

長篇小説

この世の外(ほか)なら何処へでも

装画·高畑 早苗

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

この世の外なら何処へでも

逆性石鹸水でのおおざっぱな洗浄がすむとすぐに、
「……やっぱりしてますか……」
腹部を横断して患者の上半身と下半身とをわけている純白のカーテンの向う側から声がした。若い女の声に触発されたように、
「それはこれからわかるんですよ、おじょうさん」
カーテンのこちら側、支脚器に支えられて強く曲げて開かれた上半身のない両脚の間に立って、俺はそう言葉を返してから、思わず苦笑した。俺はまだ診察を始めてはいない。
それにしても、内診台に上り、砕石位をとらされた後で自分から口をきいてくる患者というのは珍しいし、婦人科の医師が患者を『おじょうさん』などとは、まず呼ばない。
今日はいつも診察の助手をする婦長の及川信子が休みを取っている。慣れない新米看護婦相手にではかえって能率が悪いと思い、俺は一人で診察室に入り、だから、内診前の患者の外陰部の洗浄

も今日は自分でした。そうした不慣れな作業のなかで、患者の無機性が多少とも薄められていたのか——。

俺はともかく診察にかかった。

手指がひとりでに動き出した。

積み重ねた経験による無感動が、俺の右手の示、中二指を患者の左右大陰唇上に置く。そして、それに続く目的だけのための明快な二指の動きが大陰唇を広く離開すると、密生した陰毛を割って、腟前庭を中心とする女性外陰部がいとも簡単に俺の視界に露出される。なにもはばむもののない粘膜質の無機、婦人科医にとっての見慣れた光景だ。

「……してますか、やっぱり……」

患者はさらに口をきいてくる。

「妊娠するとリビド着色というのが腟の前庭部にもうすく現われてはきますが、これは個人差もあるから判断の参考程度にしかなりませんね」

「ゼンテイブ？　どこですかそれ」

「……このあたりを言います」

俺はカーテンの向う側の質問に答える意味で、腟前庭のほぼ中央に位置する外尿道口のあたりに左手の示指で軽く触れた。すると俺の右手の二指の間でひきつれたように開口されていた腟口がこのとき、大袈裟に収縮した。俺は不意にまた、馴染のない気分が自分のなかに頭をもたげようとす

るのをおぼえた。
奇妙な気分である。しかし、すぐに俺は思った——こんなことも数の中にはある——俺は、連日二十人前後の女性性器を目にし、それに触れているのだ。
俺は再び診察対象物としての女性外陰部に向けて、まともに目を据えた。
外陰の発育程度、充血、潰瘍、腫瘍などの有無。膣前庭部、膣口、処女膜の形状。バリトリン腺の腫大、尿道口の肥厚の有無。会陰の状態、裂傷の有無。——外陰部における疾病異常はとくにない。各部の発育も良好である——。
俺はよどみなくそう読んだ。実際、こういった視診というのは、〝読む〟という感覚なのだ。
次に俺は大陰唇上の右手の二指をそのままにして、左手の指で内触診に移ろうとした。すると、俺の指がわずかにそこに触れると同時に、膣口がまた急激に収縮した。さっきよりも強い力で外肛門括約筋までが収縮し続ける。
「力をぬいて下さい、なかを診ますから」
「……なにか入れるんですか……」
「いえ、はじめは内指だけで触診します」
「ナイシ……ナイシってなんですか?」
俺は、やれやれ、という気になった。
しかし、つまらない質問に、だまれ、というのは簡単だが、患者にいたずらな恐怖感や緊張を与

えるのはよくない、ましてや自分は開業医だ、すぐに俺はそうも思った。

——内診台に上る前の問診中に、この若い患者はことさらにはすっぱでふてぶてしい態度を見せた。普通よりもかえって臆病なのかもしれない。それがいわゆる反動形成されて、虚勢をはった態度になり、カーテンごしの矢継早な質問にもなっているのではないのか。そしてなによりも膣口が見せる異常なまでの過敏——。

俺はつとめて柔らかく話した。

「内指というのはですね、膣に挿入して内触診に用いる、左手の示指と中指のことですよ」

「……どうして左手なんですか?」

「……」

はて、どうしてだろう、と俺も思った。医師が患者の膣内に挿入する指は、なぜ左手のものなのか、……。Gynecological examination。俺は俺が出た大学でそうすることを習った。そして、俺はなんの疑いも持たずに永年それを実践してきたのだった。

「先生は左ききなんですか?」

「いや、右ききですが……」

「それじゃなぜ右手を使わないんですか、ナイシっていうのに」

「……いや内指に右手を用いる医師だっていると思いますよ。しかしわたしだけじゃなく、わたしの出身校系列の医師は一般的には左手を用いますね、そういうふうに慣習化されているんですよ」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「そんならわたしいやだわ、そんなカンシューカだなんてされてるものいれられるのなんて。いれるんなら右手にして下さい先生、とってあるほうの右手に！」

俺は唖然とした。実際、婦人科医としての二十数年間で、こんな患者は初めてだった。

俺は大陰唇上の右手の二指をひっこめた。俺の視界で広く離開されて生理的な淡紅色を見せていたものは緩慢に閉じて、再び密生した陰毛に被われた。膣口のあたりがへこむように内側に動く。

俺は、問診のはじめにカルテに記入した文字のいくつかを頭の中にたどった。

——氏名・中原裕子、年齢・二十歳、職業・学生、結婚の有無・なし、既往妊娠・なし——。

たしかそんなところだったと思う。しかし、顔が思い浮ばない……。

「どうしたんですか先生、はやく診察してください、右手で、ぜったい右手で！」

俺は左右の手の役割をいつもと逆にした。おおせにしたがってそうしたというのじゃない。ただこのとき、俺の中にそうしてみることへのちょっとした興味が湧いたのだ。……興味……。

女性性器を前にしての興味などというのは、あらゆる意味で俺には絶えてなかったことだ。俺は突然ふってわいた珍重すべき感情のなかで、右手の示指を後膣壁にそって膣内に静かに挿入していった。右親指は患者の前右方に向け、陰核をさけて右側大陰唇前部上に置き、第三、四、五指は患者の後方に向って、肛門のすぐ右側で臀部に密着させて、——すべての動作と役割の左右がいつもの俺にとっての逆だ。俺はしかし、左手の示指によるのと同様に膣内深く挿入し終えた右手の示指によって、膣中隔の有無、膣壁の性状、子宮膣部の位置、形、大きさ、硬さ、息肉、それらの異常、

腫瘤の有無、外子宮口の形、大きさ、方向、腟円蓋の広さなどを診ようとした。

この際の診るというのは、両眼を閉じ、腟内にある示指の先を眼にして、視るのだ。これも二十数年やってきたことだ。大体わかる。……だが、これは視えているというんじゃない。……左手でめしを食っている感じというのでもないが……。

右手指先の、粘質な暖かさや、ぬめって入り組んだ襞やが、視ることをとびこして時々俺の生理に直接とどく。そして、だんだん視えなくなってくる。いや、どうやら俺は今、視ることをやめようとしているのではないのか。俺の内側で、各部器官の名称や女性内性器といった俺がそらんじているはずの医学的な一切が、かすんでどんどん退いていく。俺は閉じていた眼を見開いた。

俺は、俺のまえに全く無防備に開かれてある若い女の股ぐらを、見た。俺の右手の人指し指を根元までのみこんで、そいつは、やけにふっくらしているじゃないか。なんという猥褻だ。実際これなんだ、女というのは。煽情的にパックリと割れて、ぬれたピンクの穴のまわりに毛が生えていて、中に入れた指をこうたわませると、入口がヒクヒクと反応する。俺は次第に大胆になっていく。親指でクリトリスの包皮をめくりあげその先端をクルクルと刺戟する。女が甘ったるくうめく。穴の周辺は粘液でベトベトだ。俺は穴の中の人指し指に中指をも加え両方をそろえて節くれだったペニスの太さにする。穴の中のそろえられた二本の指は勃起した俺のペニスだ。そいつを、出し入れする。穴の入口からちょっと入ったあたりの天井にウジャウジャと細かい襞がよっているのが触れる。そこを押し上げるみたいにしてウジャウジャを集中的にこする。女がまたうめく。もっともっとこ

する。穴の中の指の全体が窮屈に締め上げられてくる。もっとこする。太ももの内側の筋肉が細かく震えだす。指を締めつけていた穴の全体がほんの一瞬ゆるみ、ついで急激に穴の入口だけが指が痛いほどに締まる。――いったのだ――。短い声もあがった。穴の入口は痙攣状に緊張と弛緩をくりかえし、それにつれてひとりでに皮のめくれあがったクリトリスも動く。穴の内も外もベトベトでヌルヌルでグショグショだ。俺はしかし、間歇的に続く穴のヒクヒク動くのがおさまるまで、二本の指の出し入れを続けながら、毛と穴と生肉色の襞とからなる呆れるほどぬれた女の股ぐらを見続けた。穴の痙攣が次第に弱まりクリトリスもほとんど動かなくなった。俺は穴の中の指を引き抜いた。右手の二本の指は半透明のわずかな刺戟臭をもつ粘液にくるまれ、長湯をしたあとのように白くふやけている。

「……、終ったんですか……」

その声に顔をあげた俺の目はいきなり、内診台から顔をもたげている女の目と出会った。女の腹を横ぎっていたはずのカーテンは、そうなってはいなかったのだった。

俺は咄嗟になにも口にすることが出来なかった。しかし、自分の行為や、いまある状況をインチキに言い繕おうとする、反射的な患者向きの詭弁も、俺の中に湧いてはこなかった。

俺は黙って女の顔をみつめた。俺には、つくづくと見る二十歳の女の顔がひどく好ましいものに思えた。いや、単に好ましいというより、もっと強く直接に触れてくるような、まるで内側からのやみくもさを根こそぎ抱き上げてくれるみたいな、俺自身の日々のつまらなさということへの単純にし

て明快な答え、そうだ、この女こそは、俺の日常的な憎悪や諦めや嫌悪やの対象ではない、性的な女だ。

日々俺の前に列をなすお上品な患者というのを見るがいい。おずおずとしながらも実に図々しく、俺にいったいなにを見せつけているつもりなのだ。俺は、空腹な給仕の前でゆうゆうと珍味佳肴を口に運ぶグルメのことを悪く言ってるんじゃない。給仕も商売なら婦人科の医者だって商売だ。そんなことじゃないんだ。俺が言いたいのは、食欲ならぬ、性への、それもごく一般的な意味での性への興味というのを、いま生きていくためにたとえ少しでもいいから私的に持ち続けていたい男に、患者という女達はあまりにも鈍感で無慈悲だということだ。

はたして男にとって、婦人科の医師であること以上に正常な性欲を保つことにおいて危機的である職業が他にあるものだろうか。そうだ、この点で俺はまぎれもない被害妄想の、その最たるものだ、それは充分に認識している。

患者の多くは妊娠の疑いをもってやって来る。そして、それが若い娘なら十中八九は堕すためだ。せいぜいが歯医者で歯石を取るぐらいに思って来ていやがる。男と出会い、寝て、ここに来て堕すというのが、まるで連中にはワン・セットのゲームだ。ほれ、はやくドブ掃除をしろとばかりに投げ出された砕石位に、俺はいったいなにを感じたらいいんだ。そして、こういうのにはやけにブスが多い。美人ならもっと腹が立つ。まるで俺を人間とはみていないらしく、お伴の男と俺の前に出てさえ平気でいちゃつく。もっといやなのは産むために通院を重ねている患者だ。はらみ女がいやにしおらしくそれでもいそいそと内診台にのぼり、昨夜は胎児を思いやったあげくのアナル・セッ

クスに打ち興じましたとでもいわんばかりの裂けた肛門で、はやく元気な赤ちゃんが欲しいワ、などと。

俺がやっている婦人科医院の規模では、医師としてやり甲斐のある大手術などはとても無理だ。そんなのが来たら例外なく大学病院にまわす。せいぜいが汚物と血にまみれた普通のお産と堕胎手術とが俺の仕事。かくて俺を日常的に取り巻いているのは形骸化した薄汚い、あるいは冷ややかに取り澄ました、患者達の、女性外陰部。当り前といえば当り前だが、でかいのから小さいのから真っ黒いのからふたなりから、小娘のからババアのまで、どんなんだって大抵は見たことがある。しかし、そんなのを視れば視るほど俺の孤独はいやおうなく増して行くばかりで、俺の意識は婦人科の医学用語としらけきった気分とにからめとられて、結果、おれは性的な意味でのまったき孤児、というわけだ。

数年前、俺は焦りを感じて、医者仲間に紹介されてSMクラブに入会したことさえあった。だが、俺にとっては、あそこにはなにもなかった。

二十年連れ添った妻との性交、あれは、ある種の契約関係にあるもの同士が、定期的に習慣的に交す意味のない会話のようなもの、事実、枕元の小さな明りだけで真正面から顔だけを見てやる。俺の心象風景は診察室にいる時と、その時白衣を着ているか脱いでいるかの違いでしかない。殺風景というより、これはもうどういうんだろう、俺は、保険の点数を計算することにおけるベテランの同居者に、月に一、二回、三回になることはないが、律義に中身だけの、性交の義務を負ってい

るものらしい。こんなことはしかし、彼女が熱心に信奉するカトリシズムとどう関係があるのかということなどより、社会契約上の安定した夫婦という関係を保つのに実に有用なことだけはたしかだ。愛や興味というのは、絶えず過剰ということと背中合せだし、そして過剰こそは安定の憎むべき敵なのだろうから。とにかく彼女は安定している。だから、俺も安定している、ふりだけはしてきた——。

「……先生……先生……」

受付の看護婦の声でわれに返ると、俺の目の前にヌッと支脚器を突き出した内診台は、からになっていた。

「……先生、次の患者さんお待ちですけど」

俺は無言でうなずきながら看護婦に背を向け、右手の二本の指を口に含んだ。

診療時間が終り、今日は入院患者の出産予定もないことから、俺はそうそうに母屋にひきあげた。そして、すぐに書斎に入り内鍵をおろした。

あの直後に俺は、俺は白日夢を見たのだったか、と本気でそうも思ったが、口に含んだ右手の二本の指には、現実のものでしかない、味とにおいとが残されてあった。俺は、俺の口中にとけた残りの分をそっくり残すために、いつもははめることのない内診用の手袋を右手にはめ、それ以後の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com